

農家民宿群の形成で月収40万円 赤ん坊の声が聞こえる村を目指す

春蘭の里実行委員会 事務局長 ただ きいちろう 多田 喜一郎

・「春蘭の里」

石川県能登半島の先端の程近くに、観光地でもないのに、来訪者数が年間1万人を超える集落がある。能登町宮地・鯉尾地区を中心とした農家民宿群「春蘭の里」である。

鳥のさえずりが聞こえる静けさと星が輝く暗闇の中に身を置きながら、「1日1客」「自生する木の枝を使用した手作りの箸と輪島塗の御膳」「化学調味料・砂糖不使用で地域産食材のみを使用した家庭料理」「囲炉裏を囲んだ家主との団らん」など農村のありのままの暮らしを

体験できる。心の通った交流の時間を過ごせることが好評で、国内外から修学旅行や家族連れが訪れる。

・「春蘭の里実行委員会」発足の経緯

旧宮地小学校の閉校話を契機に「このままでは集落消滅してしまう」との危機感を共有した地域の有志7人は、毎晩話し合いを重ねた。山菜やきのこなど恵み豊かな山、ゴリなどがとれる川、そして、黒瓦・白壁の美しい住居群。何もなければこそある里山里海の宝を最大限に活かした地域活性化を目指し、里山に力



写真1 石川県景観形成重点地区「春蘭の里」の風景



写真2 輪島塗の御膳でいただく料理

強く自生する春蘭をシンボルに1996年「春蘭の里実行委員会」を発足。若者が戻ってくる農村再生のスローガンとして、「月収40万円。赤ん坊の泣き声が聞こえる集落」を目指し走り続け、実に20年が経過した。

・グリーンツーリズムからスローツーリズムへ

「農産加工品を売りに出していくのではなく、地域に来てもらって水、空気、食事をまるごと味わってもらおう」と1997年に滞在拠点となる「春蘭の宿」



写真3 山菜採りを楽しむ外国人旅行者

を開業。その後、農家民宿の規制緩和などの国の動きも追い風に、現在、47軒、270人規模の団体の受け入れが可能な体制となるとともに、農家民宿の開業を志す若者の移住・定着、春蘭の里の取り組みに賛同した企業の農業参入により耕作放棄地が耕され里山景観が蘇るなど、

地域活性化の兆しが現れてきた。

さらに、2016年1月、農業、漁業、農家民宿、酒蔵などの春蘭の里の次代を担う若者で春蘭の里青年部を発足した。現在、青年部を中心に農家民宿に滞在しながら地域の食、食文化を楽しむスローツーリズムの検討を進め、集落に新しい客層を取り込もうとしている。



写真4 祭りを体験する修学旅行者

・春蘭の里を未来へ

2016年、12月4日に開催した毎年恒例の「春蘭の里収穫祭」には、県外も含めて200人のファンが集った。地元出身者でつくる「春蘭の里・金沢会」によるソバや地域おこし協力隊員によるイタリア料理の振る舞いなど、多彩な食を楽しんでいただいた。春蘭の里の取り組みは、多くの共感を呼び、応援団の結成や移住者を呼び込み、そしてさらに春蘭の里に磨きがかかるという好循環が生まれている。

そしていよいよ、「月収40万円」を達成する農家民宿も複数出現してきた。たくさんの試行錯誤を積み重ね、20年前に描いた集落像に近づいてきた。さらなる将来に向けて、修学旅行を受け入れるとともに、新たなスローツーリズムにも取り組むことで、春蘭の里青年部とともに、春蘭の里を未来へつないでいく。